

1. 明治の長尾村根本

仲治郎・美わの二女美枝の夫で、七浦小学校の教員をしていた大島四郎という人物が、実際に義父仲治郎から聞き取り、周辺にいた親戚など関係者から聞き取り調査して、それぞれ書き綴ってきた資料がある。安房地域から県北の学校に異動し、最後は高等学校長を勤めている。退職後、仲治郎の生きざまや業績を伝えるため、書き溜めていたものを1983（昭和58）年に長文の原稿にまとめたものである。ただ印刷までにはいたらず、原稿をコピーしたものを数部製本し表紙に『安房の潮左為』（私家版）という題名をつけ関係者に配布したと聞く。この資料は仲治郎の生涯を知るうえで極めて重要なものである。

本報告書では平野家文書の書簡類を取り上げ、清三郎やたよ、子どもたちの様子、そして海産物問屋金澤屋の商取引などを中心に紹介しているが、当時の大島四郎には知ることができない事実があり、今後、日米交流や安房地域で果たした仲治郎という人物の偉業研究を深めていくために、『安房の潮左為』という貴重な資料も併せて調査研究することで、渡米した鮑漁師の歴史や安房の地域史を豊かなものにし、後世に向けて貢献すると思っている。

源之助・仲治郎兄弟が生まれ育った土地は、明治期にどのように描かれていたかを紹介したい。観光に使われた『房州避暑案内』（山崎房吉著・明治25年）によると、「…朝夷郡白濱ハ養壽院ヲ出テ東行一里十餘町北條ヨリ…白濱ハ里見氏ノ古跡多ク…本州外海岸ハ復期一体ニ潜水器械ヲ使用シ鮑ヲ採リ清國輸出ノ乾鮑ヲ製造シ就中布良ヨリ白濱ニ連ル海面最モ盛ナレバ滝口丸屋辺ニ御一泊漁船ヲ僦ヒ御遊観然ルベシ乾鮑ハ御帰京ノ御土産ニハ至極上品ノ物…」と、潜水器採鮑漁のことや乾鮑を製造し清国へ輸出していることが書かれている。

そして『安房郡誌』（千葉県安房郡教育会・大正15年）では、長尾村の沿革が記載されている。その概要は、安房郡の最南端にあり、東は白浜村、西は富崎村、北は豊房村神余と接しているとし、南は太平洋に面して滝口・根本の二大字になっているが、行政上、根本・砂取・本郷・東川下・西川下・横渚の6地区という。旧滝口村というのは滝口・川下・横渚・砂取の総名である。長尾村は古くは長尾荘と呼ばれ白浜郷の一部といわれ、鎌倉期は神余氏の所領であり、その後里見氏支配の領内になったものの、里見忠義が改易されると江戸幕府の公領であったり、諸藩あるいは幕臣の領地になったりと支配が変遷していく。

江戸初期は中村彌右衛門などの代官支配が続き、その後根本では松平監物の領地、さらに公領として関口作左衛門や樋口又十郎の支配下となった。元禄期に滝口が三枝撰津守の領地になり、再び公領になると代官樋口又兵衛の支配となる。正徳以後、滝口は瓦林清右衛門や同苗幸之助の知行所、根本は公領が続き野田三右衛門や原新六郎、稲垣藤四郎などの代官であったという。文化期、滝口は松平越中守、根本は稲葉播磨守の所領になったものの、その後は公領に戻り、代官森覚蔵や羽倉外記、藤田藤四郎らの支配下に置かれた。そして、天保期に忍藩松平下総守の所領、安政期に岡山藩松平内蔵頭の預所になり、幕末には代官佐々木道太郎や今川要作、大竹左馬太郎、小川達太郎らの支配下にあった。幕府最末期に滝口が幕臣の大岡勝之助、根本は深谷左源太の所領となったものの、明治維新で一時、宮谷県知事柴山文平が支配した。

なお、幕末期の房総半島南部では、東京湾口に近い沿岸部が海防上重要な地域になったので陣屋や台場が設置され、外国船が現れると「異国船打ち払い」という方策もとられた。忍藩や岡山藩では布良や川下、忽戸などに砲台を設置し、海岸警備のために領内の村々から人馬の調達がおこなわれ、台場建設や宿泊場所、人足・水主徴発など、これまでにない大きな負担が課せられていった。

明治に入って、滝口は田中藩本多正訥の移封地になり長尾藩の所領となり、根本は明治2年に館

山藩の稲葉正善の所領となった。滝口・根本は明治4年に長尾県館山県の管轄になった後に同年11月に木更津県の管轄となり、明治6年には千葉県の管轄となって現在に至っている。なお、明治5年4月木更津県においてそれぞれ正副戸長及び立合人を置き、千葉県において大小区に改められ第1大区1小区に編入、小区取扱所を紫雲寺に開いた。そして、滝口村・根本村連合戸長役場を宇砂に開設し、福原悌蔵連合戸長となったが、明治13年9月には岡崎幸右衛門がこれに代り、その後滝口村・根本村・神余村連合役場となると、福原悌蔵が連合戸長となった。明治22年5月に神余村との連合を解散すると、6月1日に滝口・根本を併せて長尾村と改称して、福原悌蔵が初代村長となっている。

房総半島南部外房沿岸地域は黒潮のもと温暖な海洋性の気候であり、夏季や秋季は台風や豪雨などで降水量の多い地域でもある。また冬季において沿岸部は無霜地帯であり、照葉樹林のなかで生態系が豊かで植生が多様である。ただ、地質的に日本海溝への太平洋プレートの沈み込みの影響で歴史的にも地震の記録が多く、沿岸地域はプレートにより隆起してきたことでの海岸段丘や岩石海岸、砂浜海岸、そして海岸浸食を受けることでの海蝕洞窟や岩が削られた入り江などが多い海岸がつけられてきた。日本列島の中央部の海域は南からの黒潮と北からの親潮との出会いがあり、水産資源では豊かな漁場となってきたが、沿岸の岩石海岸や岩礁の海域においても、古代から海藻や鮑、伊勢海老など磯根漁業は盛んであった。

ところで白浜は房総里見氏の初代義実が上陸したという伝説の地であるが、このような伝説が生まれた背景には、中世の房総沖太平洋海上交通に重要であった白浜を支配する関東管領上杉氏をたたくため、鎌倉公方足利成氏の命を受けた里見義実が白浜に入部したといわれ、この勝利により義実は、『梁塵秘抄』に古来から軍神として尊崇されていた滝口明神に太刀を一口神前に納め武運長久を祈り、神田を寄進したと謳われた。この滝口明神は白浜の滝口にある下立松原神社であり、延喜式神名帳にある朝夷四座の一つに比定する説があるように、白浜一帯は安房国支配にとっても重要な地であった。

このように海とともに生きる人々の中に中世の里見氏との伝承が息づきながら、暮らしには海藻や鮑などの磯根漁業や鰯などの沖合漁業の姿があった。布良や根本、滝口、白浜、千倉などの沿岸部は温暖で豊かな風土をもった地であり海上輸送も盛んであったと推察されている。それゆえ江戸期に入っても徳川氏が里見氏を改易して房総半島南部沿岸部を幕府の直接的な支配地にし、漁業では大都市江戸を支える生産地として、あるいは幕末には対外的な海防の地になっていったのである。

なお、里見氏改易後の家臣の帰農について長尾村での伝承をみると、齋藤東瀧著『安房志』（明治39年）には、二つしかあげられていないが「黒川森太郎 長尾村根本のひとり。醫を業とす。祖先を黒川権右衛門と云ひ。先代を太左衛門と稱す」と、「森務吉 長尾村根本の人なり。祖先森杵之助義祐と稱し。先代を儀兵衛と云。往時名僧赤鼻法印と號す。墳墓は大綱大巖寺に在り」とあり、とくに「森務吉」が後述する森家との関係で、里見氏家臣にかかわっているのであれば興味深い。

1889（明治22）年に滝口・根本を併せて長尾村となるが、滝口村内を貫流する長尾川があり、本多氏がこの地に移封された時に長尾川の名をとって長尾藩としたことから村名の由来になったという。『千葉県町村合併史』によると合併時、初代村長福原悌蔵の時期は、旧滝口村が戸数495戸で人口3142人、旧根本村は戸数158戸で人口944人、両旧村の合計、つまり長尾村は戸数653戸人口4086人となる。

1894（明治27）年、長尾村を訪れた水彩画家木下藤次郎は、『安房の冬』という絵日記をのこしている。「根本海岸」と題した紀行文には、「…藍色なす海は見ゆれど、岸边とは二三丁宛離れて浪

の音すら聴こえず。濱（瀧か）口と云う処を過ぎて、一里程にして根本村に至る。即ち道を求めて海濱に出づ。此辺一勝地にして、下は一带の貝殻の破碎せるものを以て満たされ、美麗言ふ斗なし。爰は夏時都人の遊ぶ者多しとかにて、山の半腹には養寿院と云へる大なる旅館さへあり。房州中第一温暖の処なりとか。…是より或は海辺に或は本道に道を撰はすゆきぬ。途上数人の海女の裸体にて藻屑を手にして走れるを見たり。彼等は皆其丈なす髪を振り乱して、色は銅の如くなりき。途上見るべきの佳景尠からず…」と画家の視点で村民の暮らしや村の様子が描かれている。とくに「海女の裸体にて藻屑を手にして走れるを見たり」については、『長尾村誌』によると暴風での波浪が激しいときに海岸に漂着藻が流れ着き「…老幼男女皆背負籠に薪を入れ大なる撐網を携へ海岸に群集す。かくて濱役の相図により採集…婦女子は厳冬の早晨亦海水にひたりて之の採集を為すこと珍しからず…」と記載されている。

本報告書では金澤屋のあった根本の明治・大正期をまとめた『長尾村誌』を引用している。安房白濱町近代史料集 I 『長尾村誌』は、安房白浜町史として5冊目（上巻）と6冊目（下巻）として刊行されたもので、大正期に長尾高等小学校訓導兼校長であった恩田利用が執筆した原本を復刻したものである。恩田利用は漢学者の恩田利武の子であり、利武の父恩田利器は明治維新で移封された長尾藩の人物で、城の築城にあたった兵学者であった。築城中に台風が襲来し屋敷などが破壊されたことで責任をとり退いている。その後、長尾藩は北条陣屋に移転している。利器や利武は白浜で塾を開き子弟の教育に、利用は千葉師範学校を出て学校教育に関わり校長になっている。長尾小学校勤務のかたわら、1885（明治18）年に郡から要望のあった『村地誌』の原稿を参考に、村政の事務報告書や統計表を使って客観的な事実になるように、1914（大正3）年から1918（大正7）年頃までの間に執筆したものであった。